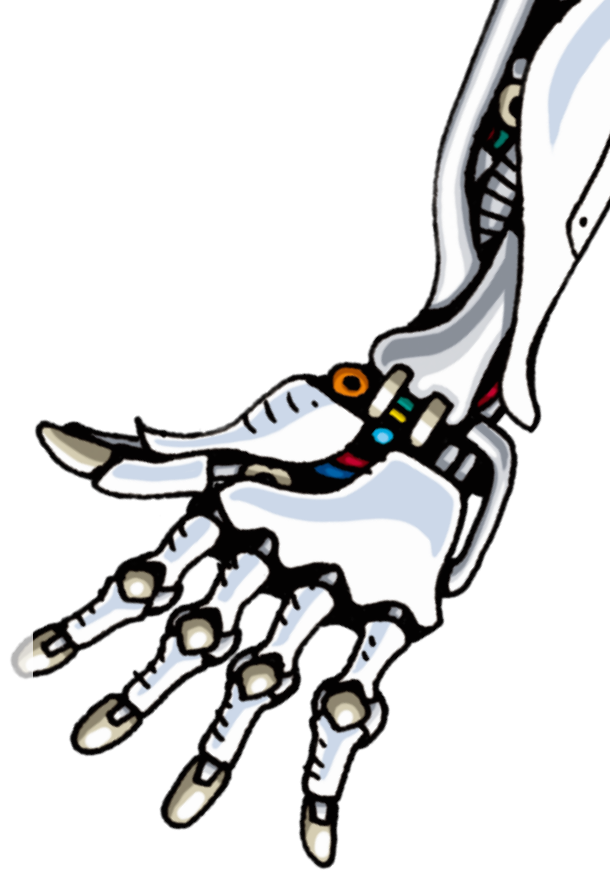


わたしたちの
あたまのなか



田名部 晃平

「人間らしさの境目」

どこまでが人間なんだろう、とふとすることがあります。


例えば完璧な人工臓器や義肢ができたとして徐々に人体と入れ換えていったら、どの段階で「人間じゃない」と言われるのかなど。(藤堂高行さんの「SEER」は、ほぼ人間に見えたし)

たしか榎野道流さんの小説：鬼籍通覧シリーズのどれかで読んだんですが**「解剖の時に困るのは、手と目」**だそうで。

(手は握らなきゃいけないし、目は合わせないといけない)

嫌悪があるのはモノではなく人だと感じてしまうからだと考え、最後に置換されるのはこの2つかもなと思います。

盲点だったので、今回は「手」についての特集です。

※リニューアルした工学分館ホームページで、 企画の過去ログが辿れるようになりました！

『手の百科事典』

(工学分館 491.19/3 (ほか))

『手と脳』

(工学分館 491.37/289/2010 (ほか))

『情報を生み出す触覚の知性』

(工学分館 141.24/1 (ほか))

『触楽入門：はじめて世界に触れるときのよう』

(工学分館 141.24/2 (ほか))

『触感をつくる：《テクタイル》という考え方』

(工学分館 408/6/187 (ほか))

『手と道具の人類史：チンパンジーからサイボーグまで』

(本館 SC551/015)

『手：その機能と解剖』

(医学分館 WE830/40)